連載講座
第58回

広聴が正しく公聴は古い
後藤新平(6)

作家　童　門　冬　二

後藤新平（ごとう・しんぺい）の名を一躍有名にしたのは、もちろん岐阜で難に合った政治家板垣退助の治療をしたことにある。多くの医者が、治療後にふりかかる影響を恐れて二の足を踏んだこの仕事を、後藤新平はそういう考えを捨てて引きうけた。

それはその時のかれのおかれた立場がそうさせた。まだ20代の若さだったが、かれは名古屋に在る愛知病院の院長だった。

「オレは公立病院の院長だ、普通の町医者とは違う」と考えていた。普通の町医者とは違うというのは、

「傷ついた人はどんな立場の人間であろうと治療する。それが公的医療機関に身をおく医師の義務である」

という考えだった。

医師たちが嫌がったのは、板垣退助が、当時“自由民権運動の闘士”だったからだ。あきらかに反政府運動の先頭に立っていた。そしてこの風潮はかなり国民の支持を得ていた。だから板垣を治療する後藤の行動は、必ずしも非難する者ばかりではなかった。

そして当時の後藤には強力なパトロンがいた。岩手県、福島県令そして愛知県令と地方行政の長をつとめる安場一平（やすば・いっぺい，保和）である。明治政府の高官たちが“維新の精神的指導者”として敬受する横井小楠（よこい・しょうなん）の高弟でもあったので、政界でも一目おかれていた。

熊本の出身だ。横井小楠はグローバルに政治を考える人物で、世界を“道のある国と道のない国”に分け、

・欧米列強はすべて道がない
・日本だけが“道のある国”になれるが、なろうとしない

と唱えていた。キリスト教を導入しようとしている、とみられて明治２年に暗殺されてしまった。しかしその影響を受けた者は沢山いる。安場はその代表でしかも政府最高の実力者大久保利通の絶大の信頼をうけていた。その安場の後藤に対する信頼が、また格別なものだったのだ。

日本の社会では、

「何をやったか」という「仕事による評価」と「誰がやったか」というヒトによる評価がある。そしてどちらかといえば、前者よりも後者が重くみられる。日常の業務でも、

「なにをいったか」という内容よりも、

「だれがいったか」という“いい手”が重くみられる。後藤の生きた時代はまさに、

「なにをいったか」よりも「だれがいったか」のほうが重くみられる時代だったのだ。

その意味では安場→大久保というつながりを持つ後藤の人間関係の絆（きずな）は、求めずして得られる強力なパワーを持っていた。そして後藤自身もパトロンたちに“即戦力”を提供できる能力を持っていた。

その能力も、この時代には早すぎる
「行政広報の能力」である。

単なる広報能力ではない。「行政」と付記する価値のある能力なのだ。即ち後藤新平がおこなったのは、

「日本国家がいまなにをおこなっているのか」

ということとを日本国民に知らせ、同時に政府職員にも知らせ（出力・発信）、その反応を求め（公聴）、納得できる反応はその事業の進行中でもこちら側の発信を中止し是正する。これは大変なことなのだ。しかし後藤はこの大変なことをあえておこなった。この発信の是正が現在電子工学でいう“フィード・バック”で、コミュニケーションで欠くべからざる要素なのだが、多くはイヤがる。

イヤがって避ける時に「何をやるか」よりも「誰がいったか」を利用する。実力者に頼んで発信中の内容をそのまま押し通す。

おこもり生活（新ウイルスとの共生ぐらし）は、時間だけはかなり多くもらえるので、国会の論議中継は克明に視聴できる。問題の進展によっては、動機は複雑でしかし事実は「公務員法違反（守秘義務に背く）ではないのか？」

と思うことも、オールド・パシフィック・サーバント（古い公僕）としてしばしばある。しかしそういう現象に至る過程も理解できる。

後藤新平もおそらくそういう現象を避けたかったのだろう、そのためにかれは新任地（職場）に赴くたびに「職員研修」を熱心におこなっている。

かれにとっては「職員研修」も「行政広報」の一環なのであって、

「事業の執行者がその事業内容を誰よりもよく理解してくれなければ困る」のだ。困るどころではなく話にならない。

だからこそこの研修にはかれが自ら講師になった。単なる発信者でなく、聴き手の反応を即時に受け止めるためだ。フィードバックをすぐにおこなったかどうか、負けおしみの強いかれのことだから例証はできないが、やっていることの姿勢はあきらかに、広報だけでなく、それへの反応をとりいれる。

「広報・広聴」の二要素をそなえていたことはたしかだ。広聴も初期は「公聴」と書いた。

「お上（かみ）がおききあそばされる」という“高い所からの姿勢”がうかがわれる。これが「広聴」に変るのは、職員の民主化がそれだけ進んだということになるのだが、そこまで至るのにかなり時間がかかった。実際にはまだ「公聴」の看板をかかげている役所もある。

「公聴のどこがワルいのだ？」

とサカネジを食いそうだが別にワルイのではない。ただ公聴よりも広聴のほうが“ひらかれた役所”の印象がつよい、という感じの問題である。

後藤新平の場合は、たとえば大正12年の「関東大震災」後の始末にしても、

「東京を復興するのではない、創造するのだ」

と告げている。

いまでは、

「復興の中には必ず創造が含まれている」

のが普通になってしまったが、当時（大正12年）のころは、東京市役所の職員でも、

「ナンのこと？」

と首をヒネる職員がいたことはまちがいない。行政広報とはそれほどむずかしいのだ。

フーテンの寅さんがトーマス・マンの“ベニスに死す”の主人公になって、美しい少年に自分の気持が伝わらず、

「コミュニケーションてムズカシイなあ」

とボヤクCMの傑作があったが、そのとおりで、これは行政広報を軽んじてきた明治以来の“フテエ（太い）シクジリ（失敗）”なのである。